

岡山県妹尾方言におけるジャとナの含意

高山 林太郎

takayama_rintaro@nifty.com

キーワード： 岡山県 妹尾 箕島 吉備津 断定の助動詞 形容動詞 時間限定性

要旨

本稿では、岡山県妹尾方言の形容詞述語文において、いわゆる断定の助動詞「ジャ」（標準語の「ダ」に対応）といわゆる形容動詞語尾「ナ」が、順に「一時的／偶発的」「恒常的／本質的」という時間限定性（Temporal Localization）に関する含意を有することを示す。

1. はじめに

1. 1. 吉備津の地理・地質・考古・歴史

児島の地名は古事記（712）・日本書紀（720）（「記紀」と略される）に見え、平城宮跡出土木簡（710-784）にも「備前国児島郡三家郷」と見える。箕島は日本紀略（979）に「都宇郡撫河郷箕島村」と見え、妹尾は吾妻鏡（1185）に「備中国妹尾郷」と見え、早島は攝津親秀 讓状（1341）に「備中国隼島庄」と、遍照寺梵鐘銘（1432）に「津宇郡撫河郷隼島庄」と見える。上東遺跡（弥生後期）からは土器による製塩の炉跡が発掘されており、当時の海岸線の位置を推定さ

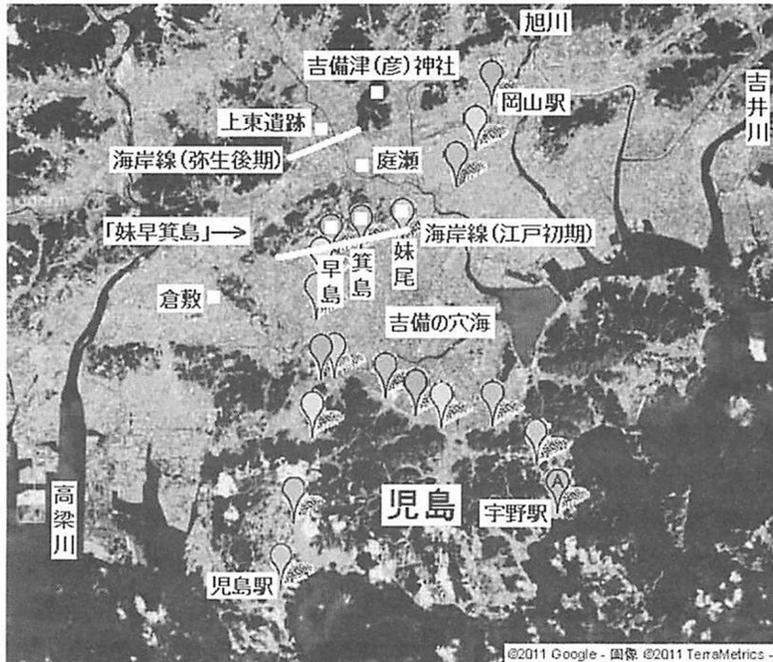


図 1. 岡山県南西部地図（Google マップより引用・加工）

せる。タタラ製鉄（6世紀）が始まると、それまでは製塩の為に沿岸・島嶼部で行われてきた森林伐採が高梁川上流などでも行われるようになり、八岐大蛇伝説で知られる河川の氾濫が大量の土砂を運んで「吉備の穴海」（＝内海）を次第に浅くして行った。小早川秀雄（1853）『吉備国史』所載「内田氏蔵海面古図」（戦国時代頃）を見ると妹尾・箕島・早島を載せる島（便宜的に「妹早箕島」と呼びたい）が描かれているが、戦国末期に宇喜多秀家と小堀政一が行った干拓事業によってこの島は地続きにされ、江戸初期の更なる干拓事業によって海岸線の北側に呑み込まれた。また江戸初期には倉敷周辺が干拓されて児島が児島半島となり、児島湾が成立した。継続的な干拓によって児島湾は縮小して行き、1959年には締切堤防で児島湾から児島湖が区切られて現在の形になった。

吉備の穴海周辺には陸側にも児島にもその間にも、弥生・古墳時代の遺跡が大量に存在しており、また児島が記紀における国生み神話でも約9番目に生れた島としてわざわざ言及されている事から、日本語の一種を話す一派が吉備の穴海周辺に濃密に分布していたであろうことは想像にかたくない。この地域は「吉備」国の「津」（港湾）、すなわち「吉備津」と呼ばれ、港湾地区それ自体は「都宇郡」と呼ばれた。この都宇郡と窪谷郡が合併して都窪郡が成立し、嘗ては妹尾・箕島・早島のいずれも都窪郡に属していた。現在では旧妹尾町（旧妹尾村と旧箕島村から成る）が岡山市に吸収され、他地域も方々に吸収された結果、独り早島町だけが都窪郡を保っている。また妹尾住田遺跡には役所跡（9-10世紀）が存在し、平安中期には妹尾が吉備津の重要拠点の一つであったと推定されている。

1. 2. 本稿の目的と先行研究批判

本稿では岡山県妹尾方言（＝旧妹尾町の方言）における「ジャ」と「ナ」の含意について論ずる。筆者は音声音韻記述を専門とするが、良質の自然談話を録音する為に実地で方言を学んだ。方言風に喋ろうとする姿勢を見せることで、話者が標準語風に喋らなくて済むようにするのが狙いである。2010年11月の初調査で「ジャ」と「ナ」両形の併存に気付き、正しい使い分けを目指して、2011年5月の第2回調査ではこの問題についても調査した¹。

先行研究として初調査の直後に確認したのは、妹尾方言そのものの研究ではないが広く岡山県方言を扱った虫明（1982）pp.88-89, pp.95-96である。「ジャ」は断定の助動詞、「ナ」は形容動詞語尾という伝統文法の分類に則りつつ岡山県方言に特徴的な諸々の活用形を例示している。本稿はそれらの事実そのものは（多少の異同はあるにせよ）受け容れ、それぞれ簡略的に「ジャ」系・「ナ」系と呼んでおく。p.95に「ジャ」系の「静かじゃった」と「ナ」系の「静かにあった」が挙げられているが、意味の違いについては特に言及せず、「静かにあった」のほうが方言的であろうとだけ述べられている。もちろん岡山県内部での地域差や世代差はあるだろうから一概には否定できないが、本稿では妹尾方言の調査事実に基づいてこれら両形がいずれも方言的であり、なおかつ意味の区別が存在することを示したい。

¹ 記号と話者名の対応：A：今木完、B：城口寛治、C：佐藤育子、D：草深登代子。詳細は付録を参照。

2. 形態に関する周辺的な諸事実

2. 1. 文頭での使用

「じゃから（だから）・じゃけー（だから）・じゃけーど（だけれど）・なから・なけー・なけーど」を文頭で使用できるか質問した。その回答は概して、「じゃけーど・ソーじゃけーど・ソレじゃから・ソレじゃけー」²は可能だが、「じゃから・じゃけー」は不可能であり³、「(ソレ) なから・(ソレ) なけー・(ソー) なけーど」は不可能である、というものだった。

2. 2. コソアドとの関係

様々な言い方を例示して可能な表現を尋ねた。「ジャ」系では「ドーじゃった・コーじゃった・ソーじゃった・アーじゃった」が可能という回答で一貫していた。「ナ」系の「にあった」に繋ぐ場合、「ドねー・コねー・ソねー・アねー」のような「ネー」系⁴と、「ドげー・コげー・ソげー・アげー」のような「ゲー」系⁵が存在していた⁶。

これらのほか、「ドンナかった・コンナかった・ソソナかった・アンナかった」のようなナ語幹カリ活用の形も存在するが、妹尾方言本来の形ではないようだ⁷。

2. 3. 形容動詞ナ語幹カリ活用

虫明 (1982) p.96 には「静かなカロー（静かだろう）・静かなカリソーナモンジャ（静かなものだ）・静かなケリヤーエーノニ（静かならいいのに）」のような形容動詞ナ語幹カリ活用の例が挙げられている。この類で唯一、確実に妹尾方言本来の形と言えるのは疑問詞に対する結びとしての「静かなケリヤー」である⁸。虫明 (1982) p.96, p.101 では形容詞なら「どこが珍しケリヤー？（どこが珍しいか？）」と、形容動詞なら「どこが静かなラ？（どこが静かだ？）」と結びことになっているが、妹尾方言ではそれだけでなく「どこが静かなケリヤー？」とも結

² 実際の発音では「ソー」が「ほー」、「ソレ」が「せー・へー」になることがある。ちなみにこの「ソー」は和語「然（さ）」の転じた「然う（さう）」に由来するものであるとされ、後述の漢語「相（さう）」に由来するとされる「そう（そー）」とは別語である。

³ 話者Dは「じゃから・じゃけー」も文頭で使用できると答えたが、年齢を考慮して標準語の影響と見なす。「から」と「けー」では「から」のほうが標準語的に見える。なお話者Cは2010年11月の調査時の自然談話では「じゃから」「じゃけー」も文頭で用いていた。

⁴ 話者Cは「コねーにあった・コねんあった・コねんにあった」の3形をこの順番で回答したが、本人が主に使うのはどれか一つだけかもしれない。

⁵ 今回の話者は「げーに」のような音形のみ使用すると回答したが、妹尾方言の内部で聞かれる形としては「げーに・がーに・ぎゃーに・げん・がん・ぎゃん」があるという。

⁶ 「ネー」系と「ゲー」系に意味の違いがあるかもしれないが今回は調査できなかった。話者の反応としては「ドネーとも言うがドゲーとも言う」というくらいのもだった。

⁷ 話者Aはこれら4つについて「戦前戦後のあたりで岡山全体に増えだした」と述べた。話者ACは全く不可能とし、話者Bは「ドンナかった」のみ可能、話者Dは「ドンナかった」は可能で「コンナかった」は微妙で他は不可能と回答した。

⁸ 話者BDは「静かなけりヤーえーんじゃが」をも可能としたが、話者ACはこれを不可能とした為、これを保留とする。更に話者Bは「静かなじゃった・静かなじゃたらえーんじゃが」を、話者Dは「静かなかった・静かなかったらえーんじゃが」を可能とした。

ぶ。話者の回答をまとめると、「どこが静かなラ？」と「どこが静かなケリヤー？」はいずれも男言葉であり、前者は「相手に対して質問する時」に用い、後者は「自問自答したり反語的に毒づく時」に用いるという。返答を要するか否かの違いに見える。「結論先取り」になるが、見かけ上そう見えるだけで裏には「ジャ」系と「ナ」系の対立があると考える (cf. 4. 3.)。

ところでこの疑問詞に対する結びにおいては「ジャ」系と「ナ」系が見かけ上は中和しており、「ジャ」系しか許容されない「日曜」のような名詞でも「いつが日曜ナラ？」となる。同様にして現在形の仮定でも「日曜ナラえーんじゃが」となるが、過去形の仮定では「日曜ジャッタラ」となり「ジャ」系の音形が復帰する。この辺りの事情は標準語と似ている。

表 1. 標準語「ダ」「ナ」と妹尾方言「ジャ」「ナ」の対照

	標準語	妹尾方言	標準語	妹尾方言	妹尾方言
	断定のダ	「ジャ」系	形容動詞	「ジャ」系	「ナ」系
体言+断定	日曜だ	日曜じゃ	静かだ	静かじゃ	静かな
推量	だろー	じゃろー	だろー	じゃろー	にあろー
過去の断定	だった	じゃった	だった	じゃった	にあった
連用+ハ+無い	じゃない	じゃーねー	じゃない	じゃーねー	にゃーねー
現在の断定	だ	じゃ	だ	じゃ	な
連体+カラ	だから	じゃから	だから	じゃから	なから
連体修飾	の過ごし方	の過ごし方	な過ごし方		な過ごし方
現在形の仮定	なら	なら	なら	なら	なけりヤー
過去形の仮定	だったら	じゃったら	だったら	じゃったら	にあったら

2. 4. 「ジャ」系と「ナ」系の音形の対立

話者の意見を総合したうえで、「ジャ」系と「ナ」系の音形に対立がある場合に絞って、妹尾方言の形を上表に示す。「仮定」の欄では後続する「えーんじゃが」を省略した。また「現在形の仮定」の欄の音形はそのまま「疑問詞の結び」としても使用される。

上表の中には一部「結論先取り」で配置したものがある (cf. 4. 3.)。この配置の是非は後回しにして、ここでは単純に、音形の上で明らかに「ジャ」系と「ナ」系が言い分けられている事を確認していただきたい。これでは意味の違いが無いと考えるほうがかえって不自然ではないかと思う。他方で標準語では見かけ上は遥かに合流が進んでおり、連体修飾における「日曜ノ過ごし方」と「日曜ナ過ごし方」(＝いかにも休日らしい過ごし方)の意味の違いが気付かれる程度である。上表で示すように、連体修飾の場面では「ジャ」と「ナ」の音形の対立は生じず、「*静かジャ過ごし方」とは言えない。述定用法(＝叙述用法)でのみ音形が対立しているが、これがもし意味的な原因で起こっているのだとしたら、装定用法(＝限定用法)で「ジャ」と「ナ」の意味を区別するのは難しい、もしくは区別する必要が無いということになる。しかし残念ながら、この点について本稿のデータから追究することは困難である。

3. 語種によるジャカラとナカラの許容度の違いの調査とその結果

2011年5月の調査では作業仮説として、語種が「ジャ」系と「ナ」系の選択に影響しているのではないかと考え、「ジャカラ」と「ナカラ」を複数の体言に下接させて許容度を尋ねたところ、下表のようになった。可能なら○、不可能なら×、微妙なら△で表わした。

表2. ジャカラとナカラの許容度の調査

話者	A	B	C	D	4者一致	備考
日曜じゃから	○	○	○	○	○	
日曜なから	×	×	×	×	×	本論の重要なポイント。
物騒じゃから	○	○	○	○	○	
物騒なから	○	○	○	○	○	
真っ黒じゃから	○	○	○	○	○	話者C「ウチの愛犬は～」。
真っ黒なから	△	×	○	○		話者A「闇夜なら言える」。
黒えから	○	○	○	○	○	
黒じゃから	○	○	○	○	○	
黒なから	×	×	×	×	×	「黒え」がある為無用なのか？
白黒じゃから	○	○	○	○	○	
白黒なから	×	×	○	×		話者Cのみ許容。
好きじゃから	○	○	○	○	○	
好きなから	○	○	○	○	○	
静かじゃから	○	○	○	○	○	
静かなから	○	○	○	○	○	本論の重要なポイント。
降りそうに見えるから	○	○	○	○	○	漢語「相」由来とされる。
降りそうじゃから	○	○	○	○	○	
降りそうなから	○	○	○	○	○	
降りるように見えるから	×	○	○	○		漢語「様」由来とされる。
降りようじゃから	○	○	○	○	○	
降りようなから	○	○	○	○	○	
堂々としとるから	○	○	○	○	○	これが本来の形であろう。
堂々しとるから	×	×	×	○		
堂々じゃから	×	○	×	○		
堂々なから	×	×	○	○		
あっさりとしとるから	△	○	○	○		
あっさりしとるから	○	○	○	○	○	これが本来の形であろう。
あっさりじゃから	×	○	○	○		
あっさりなから	×	×	○	×		話者Cのみ許容。

3. 1. 対話篇(一): 話者Bが当初「静かナカラ」を許容しなかったわけ

話者Bは当初「静かナカラ」を許容しなかった為、その理由を探った。「他の人もあなたと同じ判断になるのか」と尋ねたら、「10人居たら半分は静かジャカラだけを使い、もう半分は両方とも使うだろうが、静かナカラしか使わない人というのは妹尾に限って有り得ない」と答えた。矛先を替えて「物騒ジャカラと物騒ナカラで意味の違いはあるか?」と尋ねたら、「物騒ジャカラは恐怖心が強いが、物騒ナカラは比較的恐怖心が弱い」と答え、同席者もこれに同意した。ここで意味の違いがあるのではないかと感じた。またもや矛先を替えて「利口ジャカラと利口ナカラではどう意味が違うか?」と尋ねたら、「利口ナカラは頭の出来が良いが、利口ジャカラは努力によって成功している」と答えた。これで直感した。次に、「普通は静かだったり五月蠅かったりするものであって、ずっと静かな場所などというものは考えにくいかもしれないが、土の下500メートルとかお墓の中であれば静かナカラと言えないこともないのではないか?」と尋ねたら、判断が揺らいで「それは確かに言えるが、人間としてそんな状態になること自体が不可だ」と答えたあと、「…要するに、死んだら静かだ」と付け足した。そこで「死んだら永遠に静かだから変わることがない。変わることがある場合に静かジャカラと言うわけか?」と尋ねたら、「そうだ」と答えた。次に「ということは、今は物騒ジャカラ・いつも物騒ナカラとは言えるが、引っ繰り返して*今は物騒ナカラ・*いつも物騒ジャカラとは言えないということか?」と尋ねたら、「その通りだ」と答えた。ちなみに、話者Cは「静かナカラ」について「あの人は大人しいから」という意味の存在をも指摘した。どちらの意味でも、要するに「~ジャカラ」は「一時的」を、「~ナカラ」は「恒常的」を含意していると思われる。この仮説に基づいて話者CDに対して内省を促しつつ質問を続けて最終的に仮説を提示したところ、特に問題も起こらず同意を得ることができた。蛇足だが「物騒」について推測すると、「物騒ジャカラ」は例えば刑務所からつい先日連続殺人犯が逃げ出して町に潜伏しているようなケースを、「物騒ナカラ」は例えば単に犯罪率が高いような町であるケースを表わすはずである。

3. 2. 対話篇(二): 日曜日が永遠に続くだなんて有り得ないという話者Bの判断

話者Cの調査日には話者Bも同席していた。話者Cに内省を促しつつ、その流れの中で「*日曜ナカラとは言えないそうだが、働いていなくて毎日が日曜日であるニートの人についてなら、*いつも日曜ナカラと言えるのではないか?」と尋ねてみた。一瞬揺らいだが、結局「その場合でも、いつも日曜ジャカラとしか言えない」とのこと。仮説を提示したあとで話者Bにも話を振ったが同じ回答だった。その理由として話者Bは、「*いつも日曜ナカラと言うと、日曜という一日が24時間を超えて永遠に続いているような意味合いになってしまう」などと説明した。日曜が何度も繰り返しているという意味にはならないということだろう。この事から「ナ」の含意する「恒常」は「反復=繰り返し」の意味を排除すると分かった。知られている日本語の変種のうちに類例を求めるなら、上代語(奈良時代の日本語)において動作が「反復」または「継続」していることを表わす動詞語尾の「フ」が見つかるが、妹尾方言の「ナ」はそれよりも意味合いが狭いということになる。

3. 3. 対話篇(三)：話者Cの判断の詳細（岡山弁の談話を含む）

話者Cとの主要な対話は次の通り；「(静かジャカラと静かなカラの意味の違いって分かります?)【中略】よう似とる意味じゃけれどねえ、ちょっと待ってよ?【中略】静かジャカラ言うたらほんまに皆が静かにしとる時?それは静かジャカラ。【中略】静かなカラ?それは、もうこちらから静かにして頂戴言わんでもシーっとう静かに?してる。それが静かなカラ。【中略】静かジャカラ…今静か、皆静かにしとる。【中略】*日曜ナカラ…意味が通じんわあ。【中略】日曜ジャカラ言うたら、日曜ですよ?この日は日曜ですよ?【中略】(例えばね、ニートの人達は毎日が日曜日言うことになりますな。働いとらんのですから。そういう時は、毎日が*日曜ナカラ言うことができます?) あー…、ああ、ああ、ああ、ああ、ああ、そりゃあ、毎日が日曜…、日曜…、でも、ちょーっとやっぱしジャカラが入るね。(それもジャカラの方がよろしいですか?) うん…。*日曜ナカラ。ああ日曜…。(わしや毎日が*日曜ナカラ。) ああ日曜日…。いつも日曜日ジャカラ言うことよねえ?(そうそう。) じゃから、この私らが言う日曜ジャカラ言うのは、今日が、今日は偶々日曜日ジャカラ、言う意味じゃねえ。(うん。) ああそうか。毎日、ニートじゃったら毎日が日曜。その時には、*日曜ナカラ…。*日曜ナカラ言うたら、いつもいつも、どう言うたらええか、日曜日じゃ言うことでしょう。(ずーっと。) ずーっと。それから日曜ジャカラ言うのは偶々今日は日曜日ジャカラ言うことです。(そうですね?じゃあ今度は静かジャカラ・静かなカラを考えてみましょう。静かジャカラ言うのは、その時は静かにしとるけれども、) そうです。(また五月蠅くなる時も) ある。(言うことですか?静かなカラ言う時は、) いつも静か。(いつも静か言うことですか?)」。対話の冒頭で既に一時的・恒常的の意味の違いを反映する自発的報告があるが、それを明確に言語化して自覚できたのは筆者が「*日曜ナカラ」を通して内省を促した後ということになる。

3. 4. 対話篇(四)：話者Dの判断の詳細（岡山弁の談話を含む）

話者Dとの主要な対話は次の通り；「(静かジャカラと静かなカラの意味の違いについてちょっと考えていただきたいんですね?【中略】どっちをどういう時に使います?)【中略】静かジャカラ、ここで何々しよう、例えばまあ音楽を、静かに聞く時とか。それから静かなカラ。ちょっとニュアンス違ってくるなあ。【中略】どういう風に言うたらええのかなあ?(例えばねえ、大人しい人がねえ、大人しい人がずーっと黙っとると。そしたらあの方は、どっちですか?静かジャカラですか?静かなカラですか?) 静かなカラ。(ナカラの方がよろしいですねえ。それがなんでかというのを考えていただきたいんですね。) …。(例えばね、墓の下ね。墓の下はもう人が死んで、もうずーっと黙っとるでしょう。そりゃあどっちがいいですか?【中略】) そりゃ静かなカラ。(ナカラの方がよろしいですねえ?それがなんでかを考えていただきたいんですね。【中略】(ほったら例えばね、えっと、人通りの多いね、雑踏なんかはね、夜になったらね、静まり返りますけれども、その、昼の間は人通りが多くて、まあ五月蠅いわけですね?ほったら、その昼の間の、五月蠅いのに対して、夜になって静まり返って人っ子一人おらんと。そういう時に、今は、どう言います?) うん?ジャカラ、あの、(今は、どっち言います?ジャカラ。)

うん。(ジャカラの方がよろしいですか?) 静かジャカラ。(今は静かジャカラの方がよろしいですなあ。それに対して、人が、そもそも誰もおらん山の奥。山の奥で、人が誰も…) それは静かナカラ。(ナカラの方がよろしいですなあ。人がずーっとおらん。その区別を、どういう区別なのか意味の違いなのか言うんを考えていただきたいんです。) …静と動じゃな。全然動かない、静かナカラっていうのは、物事が、もう、いよいよ、そっからもう全然、あの、動かないって言うたらおかしいけど、(変わらん言うこと。) 変わらん言うのと。(ずーっとそのまま言うことですか? ナカラの方は。) そうそう。(それに対して、) その、そちらは、もう一つの静かジャカラ言うのは、それはもう、何かがあって、物事が、それで、ちいとば一言【≒少しばかりという】。【中略】静と、動くのと、全く動いてないのと。(っていうことですか? これをね、僕は一時的と恒常的言うことでね、言い分けるんですけれども。) ああ、はあ、はあ、はあ。どう言うたらいいのかなあ思うてそりゃ。言葉をどう出したらいいのかなあ思うてずーっと考えとって(笑)。(つまり今は静かジャカラ言うんと、いつも静かナカラ。) そう。(言うことですか。)。当初から意味の違いについては自覚があったが、それを言語化するのには苦勞したようだ。

4. 一時的・恒常的の区別を扱った先行研究に基づく本稿の問題の分析

4. 1. 日本語標準語の形容詞述語文の意味論

筆者は予備知識の無い状態から観察・Elicitationによって問題の含意の違いを汲み取ったが、これは八亀裕美が言うところの「時間的限定性の有無」に相当している。

八亀(2001)は日本語標準語の形容詞述語文の意味論を展開しているが、p.123によれば「時間に関する意味・機能的カテゴリー」としてテンス、アスペクトとは独立に「時間的局所限定」(旧用語)を考える必要があるという。妹尾方言の例を分析・理解するうえで有効と考えられた為、「時間的局所限定」の意味を説明している箇所から以下に引用する。

表3. 八亀(2001) p.50より「一時的」「恒常的」の区別について

	典型的な一時的属性表現	典型的な恒常的属性表現
時間的局所限定	有=アクチュアル	無=ポテンシャル
属性主	特定の個人や物=《個》	総称名詞=《類》
属性	属性主にとって臨時的に獲得・付与されたもの	属性主が存在している限り消滅しないもの
属性主と属性の結び付き	臨時的・場面依存的 話し手の主観への依存度大	本質的・一般的 誰でも当然の結び付きと認定可

また、p.49の説明文を、言葉を補いながら次に引用する;「時間的局所限定」が「有」る場合、「客体の存在のあるモメント(断片)を記述」しており、「うつりかわっていく、特定の世界の状態を特徴づけて」おり、「偶発的なものである」。対して「時間的局所限定」が「無」い場合、「時間から相対的に独立している、対象の特徴付けをさした」しており、「世界そのも

のの特徴付けであり、その世界にとって、あたえられた陳述は「真実」であり、「本質的なものである」。なお、「一時的」「恒常的」の区別に類するものとして「偶発的」「本質的」という区別にも注意する必要がある。両者の違いは属性主が《個》か《類》かの違いである。

4. 2. 表2「ジャカラとナカラの許容度の調査」の解釈

話者Aの調査時にはまだ本稿の仮説に至っていなかったが、話者Aが「闇夜なら真っ黒ナカラと言え」と言ったのは、真っ黒であることが闇夜にとって「本質的」であり、闇夜なし宇宙空間以外の何物にも本質的とは言えないからであろう。これは話者A曰く「(自転車等が)無灯火(で危ない)」という状況を想定しており、また「真っ黒になった言うたら顔が真っ黒になった。闇夜の真っ黒と…なあ？ふたあつ、違う。おんなし黒でも黒の…なんが違う」とも述べていて、意味の違いを自覚している。他方で話者Cは2010年11月の調査時の自然談話で愛犬のシェパードのクックについて「凄血統付きなんじゃけど、6匹か、なんか生れたんじゃけど、一番売れ残った。真っ黒ジャカラ。それを、息子が買一て、…」と述べたが、これはシェパードにとって真っ黒であることが「偶発的」だからであろう。ところでこれらの例を「恒常的」「一時的」で解釈しようとするとうる混乱が生じる。確かに闇夜はいつでも真っ黒だが、夜明けから夕暮れまではそうではなく、闇夜が永遠に続くわけではないから、時間軸の上で恒常的であるとは言えないのではないかと、いう疑いが生じる。確かにシェパードが真っ黒であるとは限らないが、クックは生涯に渡って真っ黒であり続けたのだから、時間軸の上で一時的であるとは言えないのではないかと、いう疑いが生じる。これらの疑いはいずれも現実世界の時間軸を前提としているが、属性主が《個》か《類》かという問題を見落としている。《類》が属性主である場合、個々の《個》は時間軸から離れて、代りに古今東西のあらゆる《個》を集めた広がりとしての無限集合を形成する。そのような集合における「恒常的」「一時的」は、それぞれ「本質的」「偶発的」と言い換えたほうが誤解が無い。さて、話者Cが「白黒ナカラ」を許容したのは白黒以外の配色が有り得ないパンダという生き物を想像したのかもしれない。話者Cが「あっさりナカラ」を許容したのは「簡単に・短時間で」のほうの意味ではなく、食品の味や人間の性格のほうの意味を想像したのかもしれない。

4. 3. 形態素の様々なふるまいの解釈

文頭で使用されうる「ジャ」系に対してそれが不可能な「ナ」系。特に指示詞を伴わずに使える「じゃけど」に注目すれば、これは反論する際に用いるものであり、相手の意見の真正性が「一時的」であると「断定」しているとも解釈できる。

コソアドとの関係。「ジャ」系には直接コソアド(の長音形)が上接するのに対して、「ナ」系には「ゲー」系や「ネー」系を介してしかコソアドが上接できない。これは指示詞が本来的には特定の何かを指示する含意を、つまりは「偶発的」な含意を有する為、ひとまず何か「本質的」な含意のものを介する必要があるためと解釈できる。

疑問詞に対する形容動詞の2種類の結び。「いつが日曜ナラ？」と言う時の「ナラ」が「一

時的」を含意するはずである以上、「どこが静かなら？」の「ナラ」も同様のはずであり、それゆえ「相手に（一時的・偶発的に）静かな場所を尋ねる」という意味が生じる。これに対して「どこが静かなケリヤー？」の「ナケリヤー」は「恒常的」を含意しているはずであり、それゆえ「この場所のどこが（恒常的・本質的に）静かなのかちっとも分からない、全然静かじゃないじゃないか」（または、この人のどこが大人しいのか云々）という意味が生じると考えられる。「ナラ」がそのまま「ジャ」系の一単位であるのに対し、「ナケリヤー」は「恒常的」を含意する「ナ」と結びの「ケリヤー」に分析されると考える（cf. 表1）。

4. 4. 類型論と先行研究批判

八亀（2001）pp.60-61には時間的限定性の $\boxed{\text{有}}$ と $\boxed{\text{無}}$ を形態的に区別する言語の例として、宇和島方言、熊本方言、スペイン語、チベット語が挙げられているので以下に引用する。

- ・宇和島方言（存在動詞） — 工藤（1995）p.290と八亀（2001）から引用

あの山にはへびがおる。 <非一時的>存在を表すのが基本 $\boxed{\text{無}}$
 この間、山行ったんやが、まだわらび、ありよったぜ。
 <時間のなかへの顕在化>を明示する方法の一つ $\boxed{\text{有}}$

- ・熊本方言 — 八亀（2001；村上智美との personal communication）から引用

ヤッチロノ（八代の） トマトワ アッカ。 $\boxed{\text{無}}$
 コン トマトワ サッキマデ アッカリヨッタ。 $\boxed{\text{有}}$

- ・スペイン語 — Lehmann（1999）p.44と八亀（2001）から引用

Juanita es guapa. 'Juanita is pretty.' $\boxed{\text{無}}$
 Juanita está guapa. 'Juanita is looking pretty.' $\boxed{\text{有}}$

- ・チベット語 — 武内（1990）p.10と八亀（2001）から引用

nga'i skra dkar bo yin 私の髪は白い。 $\boxed{\text{無}}$
 私の 髪 白い 叙述助動詞 ↓yinをyodに替えると含意が発生
 nga'i skra dkar bo yod 1.（例えば）チョークがついて一時的に $\boxed{\text{有}}$
 存在助動詞 2. 他の人（あるいはいつもの私）と比べて特に

4. 4. 1. 愛媛県宇和島方言と熊本県松橋方言

宇和島方言は「おる」「ありよった」、熊本方言は「赤か」「赤かりよった」が「恒常的」「一時的」の形態的区別だと主張されているが、後者には「過去」を表わす「た」が含まれており、テンスの問題を排除できていない。また工藤（1995）p.296によれば宇和島方言の動詞のアスペクトはスル・シヨル・シトルの3項対立で、順に「限界達成性＝完成性」「限界への未到達性＝不完成性」「限界への到達性とその後続段階＝パーフェクト性」を表すと云い、形態素本来の意味としてはアスペクトになる。八亀（2011）pp.10-13ではこれらの点について、p.12では熊本県松橋方言「キョーワ サムカリヨル」〈一時的現象・現在〉のように「た」を

排除した例文を挙げたり、p.11では「※運動動詞のアスペクト形式と同じ形作り（注：形容詞にアスペクトがあるのではない）」などと書いている。テンスの問題は排除できるようだが、アスペクトの問題が排除できたとは考えにくい。動詞のアスペクトと同じ形式を用いている以上、本当にアスペクトの表現でないのか説明が必要であろう。動詞が元々持っていたアスペクトの意味が何らかの形で残っている可能性が否定できない。また八亀(2011) p.10に「形容詞に、人の存在動詞が接続・融合して、〈一時的状態〉を明示する方言がある」とあるが、妹尾方言の形容動詞の場合は名詞述語文に典型的な「ジャ」が（少なくとも見かけ上は、つまり共時的には）流用されており、動詞のアスペクト体系からの流用ではないという点で八亀(2011)の意図する「方言」からは外れている。

4. 4. 2. スペイン語

Roby(2009)によれば、スペイン語のコピュラ *ser* と *estar* の意味の違いは伝統的には「恒常的／本質的」「一時的／偶発的」の違いだと考えられてきたが、それでは説明できない例外が多く、検討の結果「未完了」「完了」の違いであると判明したという。Robyの議論は形容詞述語文に留まらず様々な文で用いられる *ser* と *estar* に及び、本稿の議論とは上手く噛み合わない。従ってスペイン語については本稿では立ち入らないこととする。本稿の立場としては、「ジャ」と「ナ」が同時に許容される条件下（＝形容詞から形容動詞を経て名詞に至る連続体の中での形容動詞の占める領域）でのみ両者の含意の違いを明らかにしようとするのであって、動詞が支配する「未完了」「完了」の領域にまで注意を払うことは出来ない。更に加えれば本稿では「僕は学生ジャカラ」のような、名詞述語文の「ジャ」についても本格的には扱っていない。あくまでも形容詞の一種としての形容動詞の語幹に注目し、「ジャ」と「ナ」が接尾した場合のそれぞれの含意について考察している。そしてそのような制限を設ける限り、スペイン語の旧説も間違いとは言いつれないのではないかと感じるが、筆者はスペイン語を全く知らないので判断は控える。

4. 4. 3. チベット語

チベット語では武内(1990) pp.6-10を読むかぎり、妹尾方言と並行する現象が見られるようだ。形容詞のうち、「白い」など色・形状等の客観的性質を表すものを絶対形容詞、「良い」など大きさ・美しさ等の主観的判断を表すものを相対形容詞と呼び、語種を分ける。無標の文では、絶対形容詞(e.g. 白い)なら叙述助動詞(cf.「ナ」)をとるが(e.g. 私の髪は白い)、相対形容詞(e.g. 冷たい)なら存在助動詞(cf.「ジャ」)をとって《個》に関する特称命題となる(e.g. この水は冷たい)。有標の文では、絶対形容詞が存在助動詞をとると一時的・偶発的という含意が生じるが(e.g. 私の髪は今だけ白い・他と比べて特に白い)、相対形容詞が叙述助動詞をとると《類》に関する全称命題となる(e.g. 氷は冷たい)。ちなみに妹尾方言は、例えば表2の「堂々」について話者Bと話者Cとで「語種」への振り分け方が異なっており、チベット語のような安定した語種は考えにくい。

4. 4. 4. Stassen (2005) の議論

Stassen (2005) pp.478-479 にも「permanent / inherent」「temporary / accidental」の区別をする言語が 2 例挙がっているので以下に引用する。Stassen の議論自体は本稿とは関係無い。

- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> • Luo (Tucker and Bryan 1966: 425, 432) a. <i>à-lwójó</i>
1SG-call.NONPERF
'I am calling.' b. <i>à-bêr</i>
1SG-good.NONPERF
'I am (temporarily and/or accidentally) good.' c. <i>án má-bêr</i>
1SG.EMPH NMLZ-good
'I am a good person.' | <ul style="list-style-type: none"> • Rama (Colette Grinevald, p. c.) a. <i>m-upluul-i</i>
2-dream-PRES
'You are dreaming.' b. <i>nsut tiiskibadut s-angaling-i</i>
1PL children 1PL-hungry-PRES
'We children are hungry.' c. <i>ning suurak mliima</i>
this pineapple good
'This pineapple is good.' |
|--|--|

Luo 語では形容詞が動詞活用(b)と非動詞構文(c)のどちらの Encoding も可能で、それぞれの含意が「一時的／偶発的」と「恒常的／本質的」になる。Rama 語では動詞活用(b)をする形容詞 (e.g. 'hungry, ill, sad') と非動詞構文(c)をとる形容詞 (e.g. 'female, golden') で語種が分かれて、傾向的に前者は一時的状態を、後者は恒常的特性を表すものになる。Luo 語と Rama 語の特徴を足し合わせるとチベット語の特徴にほぼ釣り合う。Stassen の主張によれば、形容詞に動詞型 (Verbal) と非動詞型 (Nonverbal) の 2 種類の Encoding がある言語には「一時的」「恒常的」の区別をする傾向があるという。妹尾方言の 2 種類の Encoding はいずれも非動詞型の「Copula による Encoding」だが、Stassen の主張を拡張して「形容詞に 2 種類の Encoding がある言語」とすれば妹尾方言もこの部類に含まれることになる。

なお八亀 (2011) p.10 には「verbal encoding のタイプ (第 1 形容詞=いわゆる形容詞) と、nonverbal encoding のタイプ (第 2 形容詞=いわゆる形容動詞) を持つ (split-encoding)」とあり、2011/6/19 の口頭発表では「どちらかという動詞に近い／名詞に近い」という意味で Verbal / Nonverbal としたと述べていた。八亀 (2011) は Stassen (2005) 以外の研究による基準を念頭に置いていたのかもしれないが、敢えて Stassen (2005) の基準に照らして判断してみれば、第 1 形容詞も第 2 形容詞も Nonverbal になる。Stassen (2005) の意図としては、形態的な Encoding が動詞からの流用である場合に Verbal と言っているが、伝統文法で言う四段活用などの動詞活用と、第 1 形容詞のク・シク活用とは明らかに異質である。第 1 形容詞のカリ活用や形容動詞のタリ・ナリ活用は動詞からの流用ではあるが Copula と判断されるので Stassen の基準ではやはり Nonverbal に当たる。恐らく八亀 (2011) は意味の上での Verbal (動詞に近い) を意図しているのだろうが、Stassen (2005) は形態の上での Verbal (動詞と同じ形態的 Encoding を用いる) を意図している。

5. 地域差・方言差と歴史的変化

5. 1. 岡山県内部の地域差

図1の地図を参照されたい。岡山駅周辺地域の方言話者として、岡山城のすぐ横の内山^{うちさんげ}下で18歳まで過ごしたのち東京に出た筆者の母親(62歳)に聞いたところ、「静かジャカラ・静かなカラ」を全く同じ意味でどちらも使うと述べ、本稿における筆者の仮説についても、「個人的にはそのような意味の違いは無い」と回答した。また宇野駅周辺地域の方言話者として、玉野市^{たまの}宇野^{うの}で5歳から今まで過ごしている筆者の父方の祖母(84歳)に聞いたところ、「静かなカラ」としか言えず「*静かジャカラ」は無理だと言う。発話を観察する限り、現在形のばあい体言の直後にはほぼ必ず「ナ」系が来るうえ、全体的に見て「ジャ」系の出現頻度が非常に低い印象を受けた。同じ岡山県南西部でも、主として妹尾・箕島の内部で結婚を繰り返してきたため住民移動の少ない旧妹尾町と、南西部のあちこちから嫁がやってくる岡山城周辺や、四国に近くて造船所まである為よそ者が多かった宇野港周辺とで状態が異なっているのは至極当然ではあるが、ここから直ちに「妹尾方言のほうが古い」とは言い切れないのが意味の問題の難しさである。Bernstein (2003) pp.107-109を見ると、文脈によって単数・複数のいずれかを表わす英語の二人称代名詞youに対して、アメリカ南部英語ではyou allからyallという複数形が生じた結果、youが単数形となり、音形の区別が生じた事が述べられている。このように意味の区別の必要性からそれを明示する文法的形態素が新たに用意されることは有りうる。従って通時論を考えるばあい岡山県内部で比べても仕方が無く、寧ろ、岡山以外の日本各地でも同様の意味の区別が存在しているとなれば、そちらのほうから日本語の中でも「古風」であることの証明に近づけるのではないかと思う。

5. 2. 岡山県外部との対照

工藤・八亀(2008) pp.118-123によれば、愛媛県宇和島方言の形容動詞は「元気やった」「元気やない」「元気なかった」「元気なことない」「元気な」「元気な人」と活用する。そして連体形と終止形がいずれも「ナ」になる方言は他に岐阜県高山、青森県五戸・弘前・深浦方言が確認されている。そのうち高山方言は「元気やった」「元気でない」「元気や」「元気なった」「元気な」と活用するが、高山方言の「ヤ」「ナ」の並立について工藤は、類推による新しい特徴であり、「これが進むと、連体は「～な」、終止は「～や」になって、京阪神方言などと同じところに落ち着く可能性もある」と主張している。

これらの方言について工藤は「ヤ」系と「ナ」系の意味対立の有無に言及していないが、もし確認されたら古い特徴である可能性が少し高まる。「類推が進むと」と工藤は言うが、類推が進んだら妹尾方言のような状態に向かうはずであり、京阪神方言のような状態に向かうのは類推ではなく2つの系の合流(Merger)・補充(Suppletion)である。標準語もまた補充の済んだ体系を示しており、それゆえ妹尾方言のように2つの系が(並立ではなく)対立する状態が日本語の中でも「古風」であった可能性が否定できない。但し、伝統文法の形容動詞はナリ・タリ活用に限られる為、それより後代に発達した特徴ということになる。

6. おわりに

本稿の主張を簡潔に纏めると、岡山県妹尾方言には「一時的／偶発的」断定の助動詞「ジャ」と「恒常的／本質的」断定の助動詞「ナ」が存在し、形容動詞語幹に付く場合を見るかぎり含意の対立が認められた。またこの事は、八亀（2001）pp.122-123 が主張するように通言語的な観点から、Tense（時制）、Aspect（相）とは別に Temporal Localization（時間限定性）を、少なくとも形容詞述語文において設定する根拠の一つになるとと思われる。

今回は（第1）形容詞の Temporal Localization 体系や動詞の Aspect 体系を調査できなかったが、工藤・八亀が指摘する体系が妹尾方言にも存在する可能性がある。今後機会があれば調査するかもしれない。また本稿の問題は広範囲の方言地理学的調査に発展しうるかもしれないが、筆者が調査しようとするのは岡山県南西部の中でも嘗て島だった地域や（図1参照）、住民移動の少ない地域ばかりなので、結果として一部の地域に限られる可能性がある。

2011/6/19の日本語学会シンポジウムのテーマは本稿の問題に関連していた。予稿集の中で影山（2011）p.4は「これまでほとんどの文法研究が事象を表す文を扱ってきたのに対して、本シンポジウムでは属性を表す文に着目」と述べ、動詞文研究ばかりが先行して形容詞・名詞が放置されてきた事を指摘した。八亀（2011）p.13は「日本語諸方言の形容詞・名詞述語文の体系的な記述の必要性」を指摘しつつ「動詞述語文の体系記述が先行することが望ましい」と述べた。筆者はこのような学界の風潮もつゆ知らず、にわかに形容詞述語文と時間限定性の問題を扱うことになったが、結果的には一事例を提供することが出来たのではないかと思う。この問題⁹に関心のある諸氏の研究に貢献できれば幸いである。

⁹ 本稿の論旨からやや逸れるが、述語文一般について少し所見を述べてみたい。八亀（2011）p.10等を見ると、文の意味的なタイプは一時的な〈動き〉〈状態〉〈存在〉と恒常的な〈存在〉〈特性〉〈関係〉〈質〉（＝特性の束）に分かれ、動詞述語文は〈動き〉〈状態〉〈存在〉〈特性〉〈関係〉を、形容詞述語文は〈状態〉〈存在〉〈特性〉〈関係〉を、名詞述語文は〈動き〉〈状態〉〈存在〉〈特性〉〈関係〉〈質〉を表すという。述語文として挙げられているのは動詞、形容詞（形容動詞ふくむ）、名詞の3つだけだ。ところで筆者が妹尾方言の音声・音韻の調査研究（投稿予定）を通して考えたのは、調査で「風が吹く。ヒューヒュー。」と発音していただいた時の「風が吹く。」が動詞述語文なら、「ヒューヒュー。」はオノマトベ述語文になるのではないかということだ。

森岡（2001）p.197, p.231, p.264, p.276でも叙述語（＝述語）の終止法（＝文終止）の例として挙げられているのは名詞、動詞、形容詞・情態詞（＝形容動詞）の3つだけだが、叙述性を持つ副詞としてpp.288-297に情態副詞を示している。「花が美しく咲く。地鳴りが不気味に響く。花がひらひらと散る。砂塵が濛々と立つ。」を比べて、「傍線の修用語は主語を叙述すると同時に叙述語を修飾している。形容詞・情態詞・情態副詞がまず主語の状態を叙述し、その状態を動詞によって具体的に再叙するという構文である。【中略】この叙述語の並立を＝の符号で表すことにする。この構文については【中略】「補足並立」と名付けておく」と述べ、象徴言系（＝和語系・狭義オノマトベ）と漢語系（＝タリ活用）の下位分類を設けている。装定用法のみの言及だが、「ふらふら。果然。」のように裸の情態副詞による装定用法は確かに存在していて述語文の一種と認められる。

八亀の分析を応用すると、例えば「ヒューヒュー。キラキラ。アリアリ。」は順に一時的〈動き〉〈状態〉〈存在〉を表すと内省される。例えば「お星さまキラキラ。」（童謡『七夕さま』）は一時的な光景の描写であって恒星の半永久的な輝きの表現ではない（「いつでも星はキラキラ輝く」でなく「今夜も星がキラキラ輝く」）。但し装定用法ならば一時的な「風がヒューヒュー吹く。若さがキラキラと眩しい。不快感がアリアリと顔に出る。」のみならず恒常的な「不快感はアリアリと顔に出るとは限らない。ダイヤモンドはキラキラ光る。」も可能である。なお「??ダイヤモンドはキラキラ。」とすると不自然で、全称命題と装定用法の相性は悪い。なお〈関係〉を表す「似ている。等しい。同じだ。キッカリ。同時。」は属性主と属性の関係でなく〈質〉の間の関係を表すので議論が別枠になる。従ってオノマトベ述語文は〈動き〉〈状態〉〈一時的存在〉〈関係〉を表すと考える。

付録：2011年5月の調査にご協力いただいた皆様の芳名

2010年11月の調査日程は高山（2011）参照。本稿の冒頭で地理歴史を解説したが、既に高山（2011）に書いたことは省略した。以下に2011年5月の調査日程を記す。なお、地名がそのまま書いてあるのはその話者がその地点の生え抜きという意味である。また、生年月日の右に記した話者の年齢は2011/5/27時点のものである。主たる関係者のみ芳名を記したが、総数はこれより多い。「妹尾を語る会」の皆様、妹尾・箕島の方言話者の皆様、妹尾公民館・妹尾地域センター・西ふれあいセンター・KICCO ボランティアルームの皆様、その他ご協力いただいた皆様方に厚く御礼申し上げる次第である。

- 世話人 内田栄二 1937/8/01 73歳 妹尾（※ほぼ全調査に同席）
うちだえいじ
- 5/13 調査 今本完 1932/4/14 79歳 妹尾槌屋町（調査票調査）
いまもとたもつ
- 5/14 調査 今本完（自然談話）
なんばやすひこ
- 難波保彦 1936/8/26 74歳 灘崎川張（簡易調査）
なんばやすひこ
- 5/15 調査 佐藤猪左男 1930/11/27 80歳 妹尾御前神社のすぐ南（簡易調査）
さとういさお
- 光吉秀太郎 1928/9/15 82歳 妹尾南之町（調査票調査）
みつよしひでたろう
- 5/16 調査 光吉秀太郎（自然談話）
- 5/17 調査 藤井静雄 1946/2/10 65歳 妹尾玉水町（簡易調査、自然談話）
ふじいしずお
- 城口寛治 1932/5/05 79歳 妹尾中村（調査票調査）
しろぐちかんじ
- 5/18 調査 城口寛治（自然談話）
- 5/19 調査 佐藤文男 1930/6/15 80歳 妹尾同前町（簡易調査、自然談話）
さとうあやお
- 佐藤育子 1935/3/30 76歳 箕島砂場（調査票調査）
さとういくこ
- 城口寛治（同席し、妹尾と箕島の差異についてコメント）
やすいひろし
- 安井博 1948/2/27 63歳 庭瀬長野（簡易調査）
あらいひろし
- 坂本ふみ子 1951/5/25 60歳 妹尾西之町（簡易調査）
さかもとこ
- 5/20 調査 佐藤育子（自然談話）、今本完（自然談話）
さとういくこ
- 小銭幸雄 1934/2/10 77歳 箕島（簡易調査、自然談話）
こぜにゆきお
- 伊丹英男 1935/8/07 75歳 箕島（簡易調査、自然談話）
いたみひでお
- 小銭正好 1941/6/15 70歳 箕島（簡易調査、自然談話）
こぜにまさよし
- 5/21 調査 草深登代子 1941/11/14 69歳 箕島浜（調査票調査）
くさふかとよこ
- 5/22 調査 今本完（自然談話）、草深登代子（自然談話）
はやしけいこ
- 林慶子 1940/2/18 71歳 箕島赤松（簡易調査、自然談話）
ながはらさとこ
- 長原里子 1940/12/16 70歳 箕島赤松（簡易調査、自然談話）
ながはらさとこ
- 父方の祖母 高山美智子 1926/7/08 84歳 5歳から玉野市宇野（※調査時滞在先）
たかやまみちこ

また、岡山県南西部における調査地選定時には東京在住の2名に助言をいただいた。

- 筆者の父 高山豊 1948/10/07 62歳 18歳まで玉野市宇野
たかやまゆたか
- 筆者の母 高山澄子 1949/2/17 62歳 18歳まで岡山市北区内山下（標準的岡山弁）
たかやますみこ

参考文献

- Bernstein, Cynthia (2003) Grammatical features of southern speech: *yall, might could, and fixin to*.
In Nagle and Sanders (eds.) *English in the Southern United States*, 107-109. Cambridge:
Cambridge University Press.
- Grinevald, Colette. A Grammar of Rama. In unpublished draft manuscript. Université de Lyon 2.
- Lehmann, Christian (1999) Aspectual Type(s). In Brown and Miller (eds.) *Concise Encyclopedia of Grammatical Categories*, 44. Amsterdam: Elsevier Science.
- Roby, David Brian (2009) *Aspect and the Categorization of States: The case of ser and estar in Spanish*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Stassen, Leon (2005) Predicative Adjectives. In M. Haspelmath, M. Dryer, D. Gil & B. Comrie (eds.) *The World Atlas of Language Structures*, 478-479. Oxford: Oxford University Press.
- Tucker, A. N. & Bryan, M. A. (1966) *Linguistic Analyses: the Non-Bantu Languages of North-Eastern Africa*, 425, 432. Oxford: Oxford University Press.
- 影山太郎 (2011) 「属性と事象の区別とその言語学的意義」『日本言語学会第 142 回大会予稿集』: 4-9. 京都: 日本言語学会.
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現』東京: ひつじ書房.
- 工藤真由美編 (2004) 『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系—標準語研究を越えて—』東京: ひつじ書房.
- 工藤真由美編 (2007) 『日本語形容詞の文法—標準語研究を越えて—』東京: ひつじ書房.
- 工藤真由美・八亀裕美 (2008) 『複数の日本語 方言から始める言語学』東京: 講談社.
- 妹尾町の歴史編纂委員会編 (1970) 『妹尾町の歴史』東京: 第一法規出版.
- 妹尾を語る会運営委員会編 (2000) 『妹尾・箕島のむかしをたづねて (第二輯)』: 171-191. 岡山: 妹尾を語る会運営委員会.
- 高山林太郎 (2011) 「岡山県妹尾方言における両唇ふるえ音」『日本方言研究会第 92 回研究発表会発表原稿集』: 27-34. 宮城: 日本方言研究会. (※原稿集には 2010 年 11 月の調査に基づく記述しか載っていないが、口頭発表では 2011 年 5 月の調査に基づく内容も交え、本稿の件にも触れた。音韻・音声・音響に関する新情報は別稿に記す。)
- 高山林太郎 (投稿予定) 「岡山県妹尾方言の言語音について」(※6 節の脚注 9 で議論した、「オノマトベ述語文」が主に「一時的」な意味を持つという点を根拠に、名詞より動詞のほうがオノマトベに意味が近いと論じた。日本語学方面の雑誌に投稿予定で、オノマトペ・幼児語・間投音という有縁の言語記号に着目しつつ音声・音韻を調べた。)
- 武内紹人 (1990) 「チベット語の述部における助動詞の機能とその発達過程」崎山理・佐藤昭裕 (編) 『アジアの諸言語と一般言語学』東京: 三省堂.
- 農業農村整備情報総合センター編 (2005-2011) 「岡山平野鳥瞰記—永忠と蕃山」『水土の礎』
(URL: <http://suido-ishizue.jp/nihon/07/index.html>)

- 間壁忠彦ほか (1983) 『岩波グラフィックス 17 吉備路—古代史の風景』 東京：岩波書店。
むしあきまらじろう
- 虫明吉治郎 (1982) 「岡山県の方言」『講座方言学 8』：59-101. 東京：国書刊行会。
- 森岡健二 (2001) 『要説日本文法体系論』 東京：明治書院。
やかめひろみ
- 八亀裕美 (2001) 「現代日本語の形容詞述語文」『阪大日本語研究 別冊 1 号』 大阪：大阪大学日本語学研究室。
- 八亀裕美 (2008) 『日本語形容詞の記述的研究—類型論的視点から—』 東京：明治書院。
- 八亀裕美 (2011) 「日本語諸方言の形容詞述語文」『日本言語学会第 142 回大会予稿集』：10-13. 京都：日本言語学会。

Implications of *zya* and *na* in the Senoh Dialect of Okayama

TAKAYAMA Rintaro

takayama_rintaro@nifty.com

Keywords: Okayama prefecture, Senoh, Mishima, Kibitsu, auxiliary verbs of assertion, verbal adjectives, temporal localization

Abstract

This paper shows that both the so-called “auxiliary verb of assertion” *zya* (which corresponds to *da* in standard Japanese) and the so-called “verbal adjective ending” *na* have implications concerning temporal localization—“temporary / accidental” and “permanent / inherent” respectively—in predicative adjectival sentences, in the Senoh dialect of Okayama.

(たかやま・りんたろう 東京大学大学院博士後期課程 2 年)